

ろたへといふ所に、白袴と書るもあり、既にも次にもいへり、且古事記に、略歌このむし衾柔や
 が下てふは、和らかにてあづきふすまと聞ゆるに對れば、袴布のふすまは、さわやかなれば、さ
 やぐが下とはよみ給へるなるべし、

〔萬葉集四相聞〕京職大夫藤原大夫賜大伴郎女歌三首○中

蒸○恐 被○奈胡也 我下丹 雖臥與妹不宿者 肌之寒霜

〔萬葉集五雜歌〕貧窮問答歌一首并短歌○中

安禮乎於伎氏 人者安良自等富己 呂位騰寒之安禮波 麻被引可賀布利 布可多衣安里能許等其等

伎曾倍騰毛○下

〔萬葉集十四雜歌〕

爾波爾多都安佐提古夫須麻 許余比太爾都麻余之許西禰安佐提古夫須麻

〔萬葉集略解十四上〕麻布の小衾也提は多倍の約言也

〔萬葉集十四相聞〕

伎倍比等乃萬太良夫須麻爾和多佐波太○太恐 伊利奈麻之母乃伊毛我乎杼許爾

右二首○一遠江國歌

〔萬葉集略解十四上〕ふすまは、即妹が夜の衾を云、斑衾は斑摺か、又倭文にて筋有布をいふべ

し、わたさには、綿多に也、

〔新撰六帖五〕ふすま

きん人のまだらふすまのひと色にならでやつゐに心みだれん

〔倭訓栞前編二十六〕ふすま○中 加みふすまは、宇治拾遺に見ゆ、紙被也、詩集に多く見えたり、四

六ふすまは、よるのものといふ諺あり、古へのふすまは、民間皆紙ふすまを用ゐたり、四六は縦横

光俊